

まえがき

「阪神大震災体験記」にお越しいただき有り難うございます。この体験記はこのホームページの管理者が一九九五年一月十七日のあの阪神淡路大地震に遭遇した体験を、震災から七年後に記憶をたどりながら綴った回想記です。記憶が鮮明に残っていたためほぼ忠実に書けていると思っています。二〇〇二年八月から約二年間、他のホームページに掲載していましたが、今回一部修正と加筆をして再掲載することにしました。

筆者は九州の中学を出て一五歳から一九歳までの四年間、兵庫県西宮市と神戸市で暮らしていました。青春時代の真っ直中を過ごした阪神間にはさまざまな思い出が凝縮し、私にとって第二の故郷とも言えます。その地を離れて二五年後、たまたま仕事で訪れた時にこの大災害に遭遇しました。まさに青天霹靂の大惨事で壊滅的な神戸の街を見て大変なショックを受けました。それから十四年間、仕事で時折神戸に行くことがあり、その都度復興する街の姿を見てきました。高層ビルが立ち、住宅は建て替えが進み震災以前よりもきれいになり活気が戻ってきています。しかし私自身、あの時受けた恐怖の一瞬を忘れることは出来ません。そしてその体験を教訓として生かすために、自分だけの記憶に留めるだけではなく、文章にして他の人にも読んでいただくこの体験記を綴りました。無学無才な筆者が必死で綴った文章です。とても取るに足りないものですが読んでいただければ幸いです。

二〇〇九年二月一日

「ベストインテリアのホームページ」管理人 a i u e n o

阪神大震災体験記

第一章「大地震」

「ドーン……ドドーン……」突き上げるような大地の揺れに思わず身体を起こした。目覚めた瞬間私は横で寝るSさんの上に覆い被さっている。一瞬、我家で寝ていると錯覚し、普段、横で寝ている我が子を庇ったつもりなのだろう。蒲団の上で身動できずに天井を見つめる。今にも天井が落ちて来そうである。「地震？とてつもない大地震や」。恐怖に身体がこわばった。外からは「ゴオーゴオー……」と不気味な音が聞こえてくる。私の脳裏に家族の顔が浮かんだ。「もしかしたら、もう会われへんかも……」。一九九五年一月十七日早朝、神戸の街があゝの「阪神大震災」に襲われたのである。私とSさんは建築現場の内装工事で神戸市須磨区へ来ていた。お互い大阪と京都に住んでいるが現場までの通勤が大変と言うことで現場近くに数日間の予定で宿を取り、その前日神戸入りしたばかりであった。

長い恐怖の時間が過ぎてふと我に帰った私たちはお互いに考えていたことは同じであった。Sさんはすぐに携帯電話で京都の家族のもとに連絡をとり、無事を確認してから私に電話を渡してくれた。当時、未だ携帯電話を持っていなかった私も大阪の家族の無事をその場で確認することが出来たのである。その後すぐに電話が不通になった事は言うまでも無い。落ち着きを取り戻した私たちは窓から外の様子を見た。目の前にはとんでもない風景が広がっていた。「大丈夫ですか、ご無事ですか」。宿舎の女性職員さんが私たちの無事を確認に来てくれた。その顔は驚きと恐怖で泣き顔の表情に見えた。廊下に出ると積み上げられた宴会用の座卓が崩れ落ちている。一階のロビーに下りると宿泊客はもとより近所の人達が次々と避難して来ていた。この宿舎は大手通信会社N通信(仮称)の厚生施設である。

「つぶれた家に、おじいちゃんが残っている。助けて」と泣きながら女性が飛び込んで来た。寝間着姿に裸足である。私たちは、外に出た。しかし、無残にもその家は潰れている。一軒だけではない。周囲の古い家々は軒並み全壊、半壊の状態なのである。しかも、都市ガスの臭いがあたりに立ち込めていてとても手がつけられない。「何と言う事や。これは現実なんやろか？」私は自分の目を疑った。

宿舎の職員さんから「近所の壊れた家の中から声がする」と言われて私たちはその家に飛び込んだ。その家は木造の二階建てだったが一階が押し潰されている。元の二階の部屋に飛び込んだ。「おーい」と呼ぶと足元から確かに返事が有った。潰れた一階からであろう。しかし、どの辺りか見当がつかない。しかも、床は斜めに傾き家財道具がそこら中に散らばっている。足の踏み場も無いほどである。外に出て街の人たちも応援を求めた。そして先ず、窓を取り外し、家財道具を外に放り出した。未だ新しいテレビなどの電化製品もあるがそんな事はどうでもよかった。そして、畳をはがしてその下の床板をはがし始めた。道具は何も無く素手である。「バリッ、バリッ、バリッ……」Sさんは建築の専門家であると同時にラグビーで鍛えた身体である。家の構造に詳しく、力も人並み以上にある。頼もしい限りだ。必死で床に穴を空けることに成功した。穴の下には年配の夫婦がいた。一階の部屋で寝ていて地震に襲われたのである。潰れた天井と家具との空間におじいさんは命を救われた。しかし、倒れた家具の下敷きになったおばあさんはぐったりとしていた。もう息は途絶えているかもしれないが病院まで運んだ。病院には大勢のけが人でごった返している。しかし、早朝でありしかも予期せぬ大惨事に医者がいないのである。看護婦が「先生が未だ来てはらへん」と悲壮な顔をして対応に追われている。そうしているうちにどんどん患者が運ばれて来る。病院のロビーはたちまち患者で埋まってしまった。

いつの間にか日も高くなってきた。私たちは、建築現場の様子が気になるので現場の方に向かった。宿から四、五百メートルほど離れている。新築の鉄筋四階か五階建てで老人ホームと聞いている。内装を残して完成は間近である。現場に行つて見ると外形にはさほど変化は見られない。内部に入ると積み上げた資材や現場事務所の機材が倒れたものがあつたが、それほど被害は見当たらなかつた。作業中の最上階の部屋に上がり窓から外を見た。街は無残な姿をしている。いたるところから立ち上る煙と埃で空気が澱み上空はどんよりとしている。窓の下にはJRの線路が見える。線路に沿つてかなり広い空地がありその空地には住居を失つたのであろう大勢の人達が車やテントを持ち寄つて避難して来ている。一通り現場の様子を点検した私たちは我々の車に積んで来ていた大きなボールを手にして元の街に戻つた。そして再び救出の手伝いをした。朝の救出の時、素手でやるのは大変であつたが、こんどは瓦礫を撤去するのにこのボールが非常に役に立つた。そして瓦礫の下からまた一人の老人の帰らぬ姿が現れた。傍らですすり泣きが聞こえてくる。

宿の横を通る道路の亀裂から水が噴出している。水道管が破裂しているのだ。その水をバケツに汲んで使つた。泥が混じつているので飲み水には出来ないが、手を洗つたり、トイレの排泄物を流すには非常に役に立つ。しかし、何時この水が途切れるかは分らない。そうなれば、衛生面も非常に悪くなるに違いない。

私たち二人は周囲の街にも脚を伸ばした。いたるところで家が全壊半壊していつどの街も同じような光景である。特に一階部分が店舗になつている木造建築の倒壊が顕著である。あちこちで火事も起きている。ガソリンスタンドの傍まで火が近づき必死に消化活動をしている所もある。また、シャッターを開けたままのある商店では誰かが食品らしき物を手に取り、そのまま立ち去る風に見えたので咎め

ると逃げるように立ち去った。しばらく歩くとコンビニエンスストアがあった。店の前には行列が出来ていた。店にある食料品を一品百円均一で放出するというのである。私たちもその行列に並んで待った。何人かが列に割り込みもうとして小さなトラブルもあったが大方の人たちがモラルよく並んでいた。僅かだが菓子を手に入れることが出来た。昨夜宿舎に入る前に寝酒にとウイスキーを買った酒店の前を通った。その店も無残に壊れていた。「夕べのご主人は無事だったのだろうか」。夕刻が近づいてくる。街は混乱したままで、外部からの救出の手はまだ来ない。「こんな時のために自衛隊はあるのと違うか？」と言う苛立ちがこみ上げてきた。幸い私たちには泊まる宿がある。暗闇の中で不安の一夜を過ごした。

第一章終了、 次ページ第二章「大脱出」へ

第二章「大脱出」

地震から二日目の朝が明けた。窓から街の様子を見たが昨日と変わらない風景がそこにはあった。ロビーに下りるがまだ外部からの救援の手は無い。私たちの泊まるこの施設はいわゆる公的な指定避難場所では無いが、大勢の避難者を受け入れていた。でも公的でないそのためか、此処には食料などの救援物資は何も届けられなかった。しかし、個々の人たちそれぞれが助け合っているように見えた。ここはN通信の施設である。一本の電話が通話できた。私たちにはそれが外部との唯一の連絡手段として活用されたのである。

この日、私とSさんは朝から現場の方に行く事にした。この街を脱出する事は不可能なので仕事の続きをする事にしたのである。この非常事態に不自然かも知れないがその他に何も考えられないのである。幸い現場は何も異常は無いので持ち込んだ資材の分だけは作業できる。後から搬入する予定だった資材分の作業は残して、私たちはこの日一日中作業を進めたのである。そして、夕刻また宿に戻り、少しでも届けられた食料をいただき部屋に戻った。部屋に戻るとしばらくしてSさんが、「このまま、此処にいてもしょうがあらへん。脱出しよう」と言うのである。情報によると、外部との連絡道路は殆んど遮断されているか規制中と聞いていたので私は「無理はせんぼうがええんと違う?」と言ったが、「夜なら車も減ってくるやろ」と言う事になって脱出を試みる事にした。

地図を探った。深夜十二時頃である。海側の国道二号線は倒壊した阪神高速と平行しているから無理と判断、山手幹線を走る事にした。しかし、東に向かつて僅か数キロ走ると自衛隊の車両が道路を遮断していた。通行出来ないと言うのである。そこで、一旦引き返し、地図を見ながら北の方角に向かった。神戸市の西北地域、鶴越、鈴蘭台を経て六甲山の裏側へ回ろうと言う案である。深夜なので、

道に迷いながらもようやく裏六甲へ抜けることが出来た。しかし、距離的に近くなった訳ではない。むしろ遠くなった訳だが地震の被害地域からは脱出できたのである。裏六甲から中国自動車道の西宮北IC付近に来た。此処から東方面へは宝塚市に出て池田市、箕面市へ抜けられる。しかし道路は身動きできない程の大渋滞になっていた。私たちは諦めて北方向の三田市方面へ向かった。そして、地図を頼りに京都府亀岡市に抜ける道を探したのである。どの道路もかなり車の量が多い。しかしノロノロと何とか走ることが出来た。やがて山あいの細い道路に入るとまた大渋滞に巻き込まれた。空から白いものが降って来た。「寒い」。何しろ真冬である。車の燃料メーターは半分以下になっている。「もしも燃料が切れたら……」と思うとぞつとした。

ようやく渋滞の先頭にたどり着いた。山あいの急カーブの斜面にトラックが脱輪して動けないのである。地震の影響で物流のトラックが幹線道路を避けてこのような山道を迂回しているのである。狭い道路と急なカーブを回りきれず運転を誤ったのだろう。峠を越えて亀岡の盆地までたどり着いた頃は朝の五時を回っていた。幾分、車も少なくなってきた。時々軽い渋滞もあるが何とか走れることは出来た。それにしても対向車が一向に無いのが不思議である。亀岡の市街地に入ると信号機の向うで大型トラックが止まっている。その後ろが延々と数キロの大渋滞になっていた。おそらく先頭のトラックの運転手が居眠りしているであろう。先述の対向車が少ない意味がここで解った。出来れば引き返して先頭の運転手の目を覚ましてやりたいような気持ちで京都市方面に車を走らせた。

私たちは京都府南部Y市にあるSさんの自宅に一旦たどり着くと一息ついた。そしてその足(車)でSさんが我家まで私を送ってくれた。Y市のSさん宅から十kmほど大阪市寄りのN市にある我家に私が帰ったのは午前七時ごろである。

神戸を出てからおおよそ七時間の大脱出であった。「お父ちゃんお帰り」と、何事も無かったように家族に迎えられた。ちょっと拍子抜けの出迎えではあったが、時々連絡を取って無事であることは承知していたのでしようがない。我家に帰ってからの私はあの渦中の現場にいたのが夢のような気持ちになった。今度はあの大惨事の傍観者にならなかったのである。テレビなどの報道では救援活動とともに被害の様子が刻々と伝えられる。日が経つにつけ犠牲者の数が増えてくる。あの無くなった老人の姿を思い出した。あるニュースキャスターが涙ながらに伝える姿に私の心も震えた。そして、あの瞬間の恐怖と、その時、何もなすすべも無かった自分の行為に、いざと言う時の人間の無力さを知らされたような思いがする。

一カ月後、私はSさんと共に再び須磨区の建築現場に戻った。住宅の復旧を急ぐための措置として、老人ホームも住宅の一環なので早急に仕上げる必要があると要請され、残りの作業を仕上げる事になったのである。神戸市内への車の進入には交通制限があり、一般車両は車の大洪水の中を走らなければならない。私たちは緊急車両専用の道路を通って現場に入れた。そして、あの日と同じ宿舎に宿を取った。そこにはたくさんさんの救援食料が届けられていた。宿舎の職員さんの話では、その後、此処も緊急避難施設に指定されたそうである。私は青春時代の四年間、神戸市に住んでいたことがある。山と海に挟まれたお洒落でエキゾチックな美しい港町は大好きな街である。だがこの時、私たちが見た神戸の街はすさまじい埃で覆われてかつての街の姿は見えない影もなかった。これからが神戸の復興の始まりである。仕事を終えた私たちは、この街が再び元の美しい港町に生まれ変わる姿を心に描きつつ、神戸の街を後にした。

終わり